

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 7 5 号

2025 年 3 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より (9)

「イエスの贖いを信じる」ということ

端的に申しますと、「イエスを信じる」また「イエスの救いを信じる」あるいは「イエスを神の子と信じる」あるいは「神の義を信じる」あるいは「神は愛なりと信じる」と、このように「信じる」という言葉はたくさん聖書に出て来ますが、これはみな内容は同じことです。これは「神の義を信じる」と同じでありまして、「イエス・キリストの贖いを信じる」と言うことです。言葉はいろいろになっておりますけれども、聖書に、ヨハネ伝あるいはロマ書、いろいろ字は変わっておりますけれども、内容は同じことです。「イエスの贖いを信じる」ということです。これをはっきり知っておく必要がある。イエスを信じるといっても、どこをどういうふうに信じているかということによって結果が違ふ。

そうですから聖書に「イエスを信ずる」あるいは「イエスを神の子と信ず

る」あるいは「神は愛なりと信ずる」と言ったら、その内容は、神がイエスをこの世につかわして、そして我々の罪とがを贖って、われわれに永遠の命を与えて下さったというその贖いを信ずることをいう。これをはっきり知っておく必要がある。何十年教会へ来ていても分からない人がいる。

それから今日の「発見」というものは、贖いを信ずることとイエスの名を呼ぶこと、「わが主イエスよ」と名を呼ぶこととが、同じであるということが分かった。イエスを救い主と信ずるということと「わが主イエスよ」と称えるということが同じであるということ分かったということ、これがこの彼岸中の大発見です。

神の義というのは贖い

ロマ書 3 章 22 節「イエス・キリストを信ずる信仰による神の義は、すべて信ずる者に与えられる。」

神の義というのは贖いです。贖いというものが信ずる者に与えられる。「与えられる」という原語は、動詞はありません。これは「信ずる者のほうに」と言う前置詞です。英語の for、「そのほうに」という字です。「神の義というものは、信ずるすべての人に向かっている」という字です。そうですから 22 節は、「すべて信ずる人に向かっている」となる。

それからロマ書 10 章 12 節のほうは、彼を呼び求めるすべての人を「恵んで下さる」という動詞になっておりますけれど、これも原語は「向かっている」という字です。ロマ書 3 章 22 節と全く同じ前置詞。これもすなわち「イエス・キリストの恵みが」、恵みというのは贖いです。神の義と一緒に、「贖いが彼を呼び求める方に向かっている」。

「そのほうに向かっている」という原語の前置詞は、「向かっている」という意味と「向かって中へずうっと入っていく」という意味がある。原語の前置詞は、「そのほうに向かっている」というのは「その中へずうっと入っていく」という字なのです。

そうですから、ロマ書 3 章 22 節の「神の義は、贖いは、すべて信じる人に向かって、そのほうへずうっと入っていく」。…神の恵みが、イエスの贖いが、

彼を呼び求める人にずうっと向ってその中に入っていくという。3章22節と10章12節は、全く同じ言葉です。パウロは、「信ずる」ということと「彼の名を呼ぶ」ということは全く同じ意味に解している。

称名は乱れた心と共存し得る

第3の同じだという理由は、信ずるということは心の状態でしょう。贖いを信ずるとか、自分は罪人であると信ずるとか、あるいは神の子とせられたと信ずるとか、復活を望むということは心の状態です。この心の状態、信ずるということ、すなわちロマ書8章までに書かれたことは心の状態です。

この心の状態は、われわれはいかに悩み、心の乱れているときには、信仰とわれわれの心の乱れとは共存しない。よろしいか。われわれの心の乱れている時は、信仰の余地はない。われわれは、信仰だけに頼っていて危ない。いつどうなっているか分からない。

ところが称名、名を呼ぶということ、これは心の乱れと共存し得る。恵心僧都は「妄念のうちより称名せよ」と言った。私はこの意味において、同じであるというよりも、称名の方が信仰より優れていると信ずる。なぜかと言うと、乱れた心と共存し得る。信仰、望みは、乱れた心と共存し得ない。

信仰は感情ではない、知恵です

エペソ書 4 章 18 節「彼らの知力は暗くなり、その内なる無知と心の効果とにより、神の命から遠く離れている。」

原因は、18 節は、無知と心が頑なという。これが、われわれの状態です。未信者の状態です。無知です。知らない。無知というのは知恵の問題でしょう。この頃の人間は人生哲学がない。無知です。自分の心が分かっていない。これは心の硬化が原因です。心が頑なのです。自分の考えを振り回している。無知です。神を知らず、天国を知らない。

信仰は感情ではないですよ。知恵です。天国はある、われわれが死んだら、天国へ行き、復活するという intellect (知性、知力) です。一つの知識です。信仰はありがたいと思う感情ではないです。感情みたいなものはいつも動いている。そんなものは頼りにならない。

それは心が頑なだからです。ここで、この字が一番大切です。自分の心が頑ななことは、残念ながら自分には見えない。あたかも自分の顔は見えないが如しです。自分の顔は分からない。その効果によって、無知の状態が続いている。それだから永遠お生命から遠く離れている。

新しき人を着よ、着せられよ

エペソ書第4章24節、「新しき人を着よ、着せられよ」。

新しき人を着て、古い人を脱ぐというのは、洗礼の儀式を受けるときです。われわれはイエス・キリストの贖いを信じ、神の子とされ、永遠の命を頂いた、復活の望みを頂いた、これがすなわち「古き人を脱ぎ捨て、新しい人を来た」ということです。イエス・キリストの贖いを信じたときに起こる現象です。これが、われわれ信者の姿。

すなわちイエス・キリストの贖いを信じたときに、われわれ罪の身はこれで死に、そして永遠天国に帰り、復活するべき命を頂いた、新しい衣を着た、新しい人を着た、そうですから信仰と同時にこれが起こっている。ですからこの動詞の形は、1回きり起こる動詞の形です。

ですからイエス・キリストの贖いを信じた時に、イエス・キリストはわれわれの罪のために十字架についてわれわれの罪を贖って下さって、われわれに永遠の命を与えて下さった。これを信じた時にわれわれは、この古きからだは生きているけれども、それで十字架につけられたことになるし、そしてそのときに復活の新しき人を着たことになる。

聖霊は徐々に下る。力は年と共に増す

ここを10年前、昭和42年5月21日、ここを講義した。大体、今と同じような講義をした。ただ10年前には、「主の名を呼べ」ということはなかったのですけれど。私はロマ書の第2回講義の時に、主の名を呼ぶということが救いの条件になっているということが分かったのですが、もし10年前に、内村先生と同じく70の年で召されていたら、私はロマ書を50年学びましたけれども、主の名を呼ぶということが救いの条件となっているというロマ書のこの重大なることを知らずに死んでいる。

諸君もどうぞ体を大事にして、長生きをして下さい。「聖霊は徐々に下る。力は年と共に増す」と内村鑑三は言われた。そうですから、「われわれみたいな者」はだんだん長い時をかけて真理を学ぶ。

ロマ書 10 章 12 節は、ロマ書の画竜天晴

私は、今日のこの称名のごとは、ロマ書 10 章 12 節「ユダヤ人とギリシア人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。」こそは、ロマ書の画竜天晴だと思う。もしこの 10 章 12 節がなかったら、8 章までにパウロはあんなに贖いのこと、万人の罪と贖いの信仰、復活の望みと、こんこんと 8 章までに説きましたけれども、もし 10 章 12 節がなかったならば、いかなる麗しい信仰、望みも、われわれの妄念のために、われわれの心の乱れのために消されてしまっている。しかるに 10 章 12 節があるために、贖いの信仰が生きてくる。実にロマ書 10 章 12 節こそは、ロマ書の画竜天晴ともいうべき場所です。

道徳を学ぶ部分では教義を思い出せ

われわれ教会に来ておりました何十年と信仰の教義を学んでおりますけれど、教義が宙に浮いていて、行ないとちっとも密接していない。日々の行ないが信仰と離れ離れになっている。こういう状態にわれわれがありますので、われわれは、何十年教会へ来ていてもちっともものにならない。前と一緒に。非常にこれは悲しむべきことでありまして、われわれは道徳を学ぶ部分につきましては、特に教義を思い出すということが必要であります。このことはいくら繰り返しても繰り返し過ぎないのでありまして、本当にわれわれは教会へ来ている信者であると言いながら、誠に誠にあさましい信仰状態、日常でありまして、むしろ未信者の方々に劣っているという現状であります。これがキリスト教は魅力がないという証拠です。自分を見たら分かる。

どんなにみすぼらしい職分であっても一生懸命やれ

いよいよ 4 章から、4, 5, 6 章と実践道徳、道徳の問題に入ります。4 章からすぐに行ないの部に入るのでありますけれども、パウロは 4 章の 1 節から 24 節まで 3 回にわたって申し上げましたが、すなわち、パウロは実践道徳に入る前に、ここで「あなたは召されて信者になっている。召されたから、その召しに応じて、すなわち生活せよ」。また、あなた方は教会と一体をなしているのだから、みんな職分が違う。そうですから自分の行ない、職分については、どんなにみすぼらしい職分であっても、それを一生懸命やるんだ。そしてまた、毎日のわれわれの道徳というものは、実に復活の希望を持って日々天国に近づきつつあるんだという、これをもって生活するんだということです。4 章 1 節から 24 節まで、またこんこんと信仰を繰り返した。いよいよ行ないへ入る前に、また信仰を繰り返している。いかに我々の行ないというものが信仰というものと離れることが出来ないということを、パウロはまたここで説明した。

「我が主イエスよ」とよびつつ、目の前のなすべきことをする

そういう罪人が許される方法は、イエス・キリストの贖いに頼るしか、一手しかない。その贖いを信ずるということが、これがまたわれわれは出来ない。難しい。そうですから、われわれはその手は、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶほか手が無い。

われわれはこういう難しいことをパウロから何度聴いても、何十年聴いても、ただ日曜日の朝 1 時間ここで聴いているだけでは駄目です。落第です。私も数年前にそのことに気が付いた。50 年、60 年やっても、ちっとも変っていない。前と一緒にです。だから救いの条件に「わが主イエスよと主の名を呼べ」ということを、パウロはロマ書 10 章 12 節、13 節に述べておりますが、どうぞ皆さんも、なるべく実行するようにして頂きたい。

要するに、「我が主イエスよ」と主の名を呼びつつ、毎日目の前に置かれたるなすべきこと、自分のなしたいことではなしに、毎日自分の目の前に置かれたるなすべきことを主の名を呼びつつなして、そして又日曜日に来て、この信仰の告白というべきキリスト教道徳を聴いて、それをまた参考に分相応に、日々自分の行ないとしたいと思うのであります。

『仏教とキリスト教の比較研究』 増谷文雄著について

この間、教会のメンバーの山口周三君が、「先生にちょっと見せたい本があるので夜に訪問したい」と言ってきた。「お前、なんだ、無理にこんな夜来んでも、またいつか会える機会があるんだから、会う機会がいいじゃないか」と言ったら、「いや、急いで会いたい」と言って、この本を持って来てくれました。この本は、増谷文雄と言って、仏教の宗教学者です。私より数年後に東大の宗教学科を出られた方です。日本における権威ある仏教の専門家の一人でしょう。この方が『仏教とキリスト教の比較研究』（筑摩書房）という本を出された。

この本の重大な一つのところに「キリスト教の信仰の基本構造と、浄土門の仏教の信仰のそれとの間に見いだされる驚くべき類似は、全く瞠目すべきものが存する。そのことを、私はできるだけ突っ込んで書いてみたいと思っている」と、そういうことを序文のうちに書いてありまして、そして、キリスト教と浄土門の仏教との信仰の構造の類似点について、数章にわたって論じられている。

これは、私がずっと以前から「よく似とるなあ」「これは不思議だな」と思って、浄土門の仏教の信仰とキリスト教とはよく似ているなというのはずっと思いつけていたのですが、これは私とまったく意見が一致しております。そうですから、私の話をいつも聞いている周三君が、あんまりこれよく似て

いるですから、「先生、仏教学者がこう言っております」と私に持ってきた。

私がここで称名の信仰の話をしておりますが、これがただ私の思いつきだけではなしに、宗教の理論、キリスト教の神学と言いますか、それから見て、称名の意義というものがいかに広く深いものであるかということ、日本の権威ある仏教の大学者の一人が、私がここで話している信仰の話を全面的に承認し賛成しておられるということは、非常に嬉しいことであると思うのであります。

キリスト教と仏教の良いところを見よ

いつも申し上げるとおり、日本はキリスト教と仏教とが流れ込んでいる。こういう国は、誠に世界においても日本の国のごとく両方の教えを公平に見ることが出来るという、日本民族は特権を持っている。日本民族が advantage を持っていると思います。そうですから、われわれ両方の良いところを見ることが出来る。誠にこれ幸いなことでありまして、私は将来、偉大なるキリスト教の指導者というものが日本民族から出ることができるよう衷心より希望しつつ、われわれのキリスト教の信仰の勉強を神様からさせていたいただきたいと思います。

本日 1977 年 10 月の第 2 日曜は、私が伝道をはじめましてからちょうど本日をもって満 30 年が終了いたします。次の日曜から、すなわち第 31 年目に入るわけでありまして、私としましては、今日は誠に記念すべき集会でありました。

その集会に、お忙しいところ、おちこちから今日の礼拝に対しまして、ご出席いただきましたことに対して、私は深く感謝の意を表したいと思います。